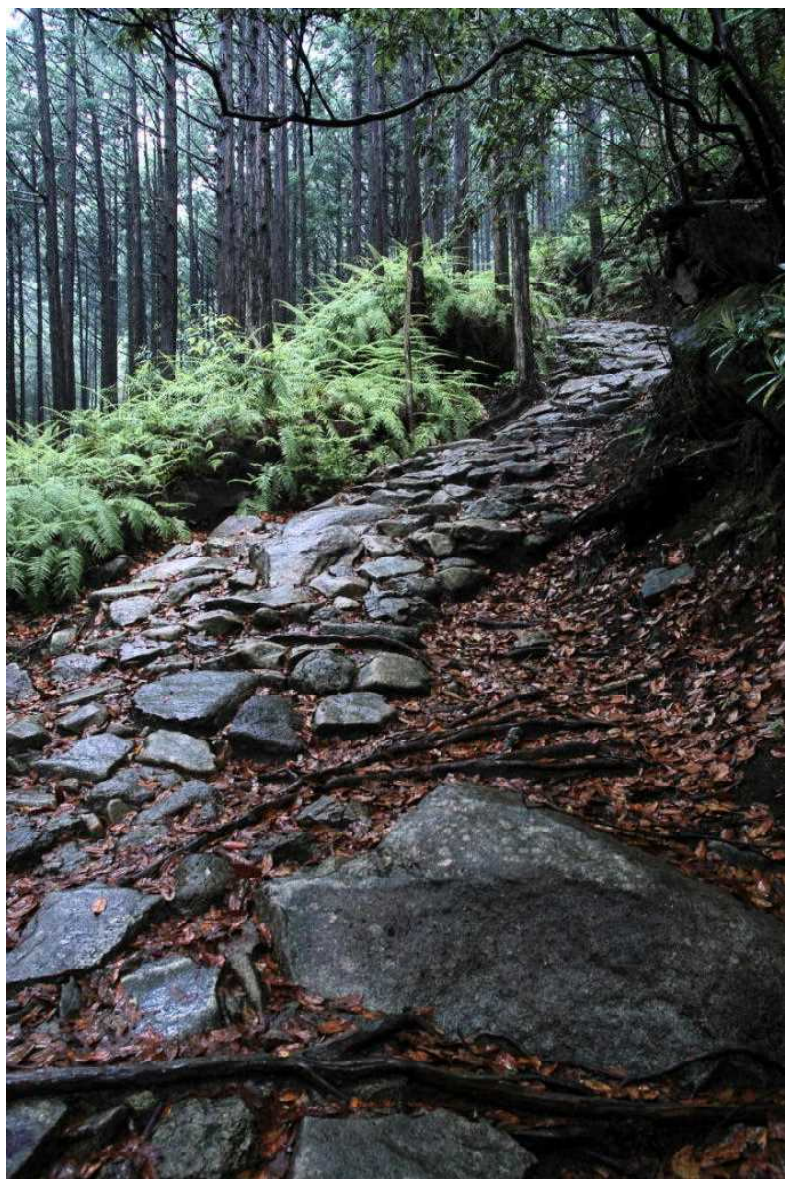


「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録一〇周年記念

歩いてみよう！「世界遺産の道―熊野参詣道伊勢路」



三重県教育委員会



熊野参詣道伊勢路 馬越峠道の石畳

目次

お伊勢参りと熊野詣（ものがたりの始まり）	1
熊野参詣道伊勢路について	22
紀伊山地の霊場	44
歩いて楽しむ世界遺産	53
あとがき	65

お伊勢参りと熊野詣くまのもうで

（ものがたりの始まり）

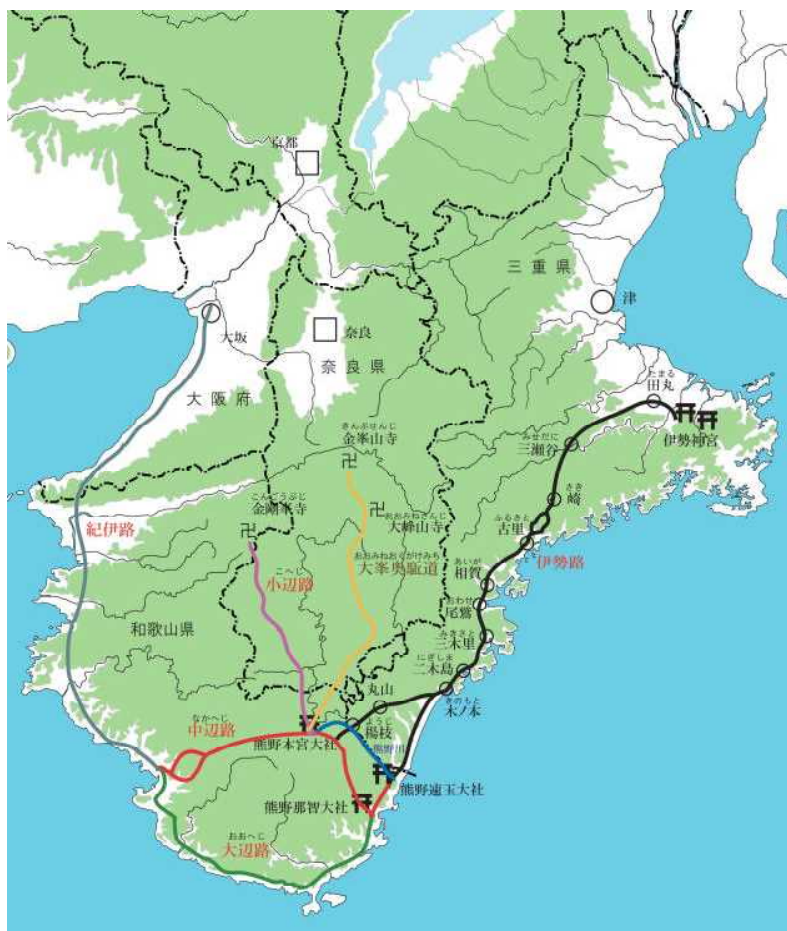
A Y A こんにちは！私は、世界遺産と旅行が大好きな大学生の
A Y A（あや）といいます。今日は私の先生といっしょに、世界
遺産に登録されている三重県の熊野古道の伊勢路を歩いています。
これから熊野古道や世界遺産について、先生からいろいろ教えて
いただこうと思います。それでは先生をご紹介しますね。伊藤先
生ー。

伊藤先生 はいはい。A Y Aさん、最初に言っておきますが、「熊
野古道」というのは、愛称のようなもので、世界遺産の呼び方と
しては、「熊野参詣道くまのさんけいみち」の伊勢路なのですよ。それにしても、君は
旅行が好きなかだけあって足が速いね。もう少しゆつくり歩いても
らえないかな。

A Y A 先生こそ、さつきから食べてばかりでいて、運動不足じ
やないのですか。しつかり歩いてダイエットした方がいいですよ。
伊藤先生 いやいや。旅の楽しみの一つは、その名物を食べる

ことですよ。その土地に伝わる料理やお菓子も大切な文化ですよ。
A Y A 先生の場合は、食えることは旅の楽しみの一つどころではない気が……。まあ、それはそうと、先生、私たちが歩いているこの道は、どこへ通じているのですか？

伊藤先生 熊野参詣道伊勢路は、伊勢神宮と熊野三山というところを結ぶ道で、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部ですね。日本のほぼ中央、三重県と和歌山県、奈良県に広がる紀伊山地に、古代から続く神社や寺院、そして山伏などの修験者しゅげんじやと呼ばれる人々の修行の場などがたくさんあり、これらをまとめると、「熊野」「高野こうや」「吉野よしの」という、日本を代表する三つの霊場が集まっているのです。そしてそれらの霊場に通じる道が参詣道と呼ばれ、霊場の間を行き来できたんだよ。それらを含めて「紀伊山地の霊場と参詣道」として二〇〇四年七月七日に、日本で一〇番目の世界遺産に登録されたんですよ。



紀伊山地の霊場と熊野参詣道

A Y A 熊野参詣道伊勢路は、伊勢神宮と結ばれていたんですか！
ところで熊野三山というと具体的にどこなのですか？

伊藤先生 熊野三山は和歌山県の新宮市の熊野速玉大社、田辺市の熊野本宮大社、それと那智勝浦町の熊野那智大社を合わせた呼び方なんですよ。熊野三山は、紀伊山地の代表的な三大霊場の一つです。ところで、A Y Aさんは、「伊勢へ七度、熊野へ三度」という言葉を聞いたことがあるかな？

A Y A それ知っています！伊勢神宮へは一生の間に七回参るのが良いってことですよね。ということは熊野三山へも三回参るのが良いということですね。

伊藤先生 はい。そうですね。それが理想だったそうです。とくに江戸時代は、伊勢神宮は、最も代表的な旅の目的地であり、伊勢から遠く離れた関東や東北、あるいは九州の人々にとっても、七度とまでいなくても、せめて一生に一度は伊勢へお参りした

いというのが夢だったといわれています。

A Y A 今では電車や車で日本中のどこからでも伊勢神宮へ行くことができますけど、江戸時代だと、歩いて行くのですよね。

伊藤先生 そうですね。江戸から伊勢まで片道一五日ぐらいかかったそうですよ。そして江戸時代にはだいたい六〇年ごとに「おかげ参り」といって、年間で数百万人という大勢の人々が熱狂的にお伊勢参りへ出かけるのが大流行しました。空から伊勢神宮のお札が降ってきた、などとのうわさが「おかげ参り」の流行の引き金になったといわれています。

A Y A お伊勢参りのためだけに、はるばる遠くから伊勢まで来るのですか？

伊藤先生 いえいえ、実はそれだけではないのですね。お伊勢参りの後は、京都や大坂（当時は「大阪」ではなく、「大坂」と書きました）へ見物に向かう人も多かったのですが、なかには熊野詣、

そして西国さいこく三十三さんじゅうさん所巡礼しよじゅんれいといって、さらに長い巡礼の旅を続ける
こともありました。その時に通ったのが、熊野参詣道伊勢路だっ
たのですね。

A Y A 江戸から一五日かけてのお伊勢参りの後に、さらに熊野
やその先まで歩いて行くのですか？それを考えると、先生もこれ
ぐらい歩いただけで音を上げていてはダメですよ。

伊藤先生 ゴホン。それはさておき、実は古くは伊勢路を利用し
ての熊野詣はそう多くなかったようで、むしろ紀伊路といって、
大坂から和歌山を回ったの参詣が多かったようです。とくに平安
時代の終わり頃、今から八〇〇〜九〇〇年ぐらい前になると、京
の都、つまり平安京から、皇族や貴族が好んで熊野詣に出かける
ようになりました。その際は京都から淀川という川を下り、大坂
から和歌山を回り、熊野参詣道の「なかへち（中辺路）」という道
を通って、熊野本宮に向かったとのこと。熊野本宮大社から

は、三重県と和歌山県の県境を流れる熊野川を船で下り、熊野速玉大社や熊野那智大社に詣でて本宮大社に戻り、もと来た道を都へ戻ったとのことでした。

AYA では、皇族や貴族といった都から来る人は、伊勢路を通らなかったのですか？

伊藤先生 そうですね。熊野に詣でてその後に、伊勢路を通った僧侶の話はありますが、都の高貴な人々が伊勢路を使って熊野詣を行った確かな記録はないですね。ただ、平安時代の終わりに、後白河法皇が編集した『梁塵秘抄』^{りようじんひしやう}という当時の歌を集めた本の中に、伊勢路のことを表した歌詞があります。このことから、伊勢路も紀伊路と並んで、熊野への参詣道として知られていたことがわかります。

AYA 伊勢路も古くからあったけれど、江戸時代頃になって、多くの人々に利用されるようになったのですね。ところで、江戸

時代に伊勢路を歩いた人々つて、武士とかですか？

伊藤先生 いいえ、むしろ農民だとか、お店に勤める町人など、庶民的な人々が多かったようです。「おかげ参り」の際には、無断で仕事を休んでお伊勢参りに出かけても、伊勢神宮のお札など、お伊勢参りをしたという証拠を見せれば許してもらえたそうです。例えお金がなくても、道中では飲食や宿の世話を受けて旅を続けていったそうです。

A Y A 農民もお伊勢参りに行けたのですか？年貢の取り立てが大変で、自由に旅ができたとは思えないのですけど。

伊藤先生 確かに当時の農民は、田んぼごとに定められた米の収穫量の半分ぐらいを年貢として納めなければならぬし、農民が田んぼを作るのを止めて逃げ出してしまうのを防ぐため、農民が旅に出ることは禁止されていました。しかし、お伊勢参りだけは例外的に許されていたのです。

A Y A　でも、農民たちの間で、なぜお伊勢参りがそんなに有名になったのですか。

伊藤先生　それには「御師」と書いて「おんし」と呼ばれた人々の活躍があつたからです。彼らは、伊勢神宮の神職しんしよくなのですが、江戸時代より前、日本中で戦乱が続いた時代には、伊勢神宮に参詣する貴族や武士も少なくなり、御師は全国各地へ布教活動に出かけ、伊勢参宮を呼びかけるとともに、伊勢へ来た参詣者の宿泊の世話を行うようになりました。これにより、伊勢神宮への信仰が全国に広がつたのですが、とくに伊勢神宮の外宮は、豊受大御神とようけおおみかみという農業の神様をまつていたのと、布教活動の際に「伊勢暦」と呼ばれる、一年間の暦を知る冊子を配つたのが、農業に大変役立ったことから、農民たちの信仰心に火がついたのですね。

A Y A　それでも遠くから伊勢まで旅をするのは、随分と時間とお金がかかったのではないのですか？農民の暮らしてそんなに



↑ 「天明四(1784)年」伊勢暦

← 同表紙

三重県総合博物館蔵

豊かなイメージがないのですが。

伊藤先生　そうですね。実はお伊勢参りで農民たちが旅に出かけると、思ってもみなかった効果が生まれました。それは、各地の農民たちが出会うことで、農業についての情報交換や技術交流が盛んになり、稲の品種改良をはじめ、農業技術の進歩につながりました。そうになると、暮らしも余裕ができてきますね。それでも伊勢から遠い人々にとっては、旅にかかる経費は大きいですね。そこで、村人たちは、皆で少しずつお金を出し合って、くじ引きで代表者がお伊勢参りをするということを始めました。これを「伊勢講いせこう」といいました。「講」とは、信仰などで同じ目的をもった人々の組織をいいます。

A Y A　お伊勢参りが盛んになった理由はわかりましたが、熊野詣や西国三十三所巡礼？でしたっけ、これらとはどうつながっていくのですか？

伊藤先生 いい質問ですね。お伊勢参りを済ませた後、一生のうち、めったにできない旅ですから、せっかくなので華やかな都や商業都市の大坂を見物したい、という気持ちをもつ人もいれば、もっと多くの寺社参りをしたい、という気になる人がいます。ここで西国三十三所巡礼について説明しましょう。実はこれが熊野参詣道伊勢路にとって大きな意味をもつことになるのです。A Y Aさんは、巡礼というかどうかというイメージをもちますか？

A Y A ええっと、白っぽい服を着て、笠をかぶって、杖をついてお祈りしながら歩くって感じですか。

伊藤先生 そうですね。巡礼者の特徴はだいたいそういうところですね。西国三十三所巡礼の場合、衣装は「白衣びやくえ」と呼ばれる白装束もあるのですが、着物の上に「おいずる（笈摺）」と呼ばれる袖なしの法被はっぴを羽織るのが標準的なスタイルでした。この「おいずる」ですが、お伊勢参りを終えてから、伊勢の隣町の玉城町に

あつた田丸城というお城の城下町などで手に入れることもできませんでした。田丸城下町は、熊野と京都・大坂へ向かう街道の分岐点でもありました。ここで巡礼姿に着替え、改めて熊野参詣道を熊野に向かつて旅を始めたんですね。

A Y A 巡礼服に着替えると、身が引き締まる気がしますね。

伊藤先生 「おいずる」は、巡礼の途中に万一、命を落とすようなことがあつた場合、その衣装のまま埋葬してもらう「死装束^{しにしょうぞく}」とも言われていたのです。そして、無事巡礼が終わり、「おいずる」を脱ぐことで、生まれ変わるという意味があつたのだね。

A Y A 昔は、そのような姿で熊野参詣道伊勢路をたくさんの方が熊野三山を目指して歩いていたのでですね。

伊藤先生 熊野詣と西国三十三所巡礼は、実を言うと少し違うんだよ。熊野詣は、熊野三山のそれぞれの神社にお参りするのだけ



笈摺（おいずる）と菅笠（すげがさ）
三重県立熊野古道センター蔵

れども、西国三十三所巡礼とは、正しくは西国三十三所観音霊場巡礼といって、和歌山県、奈良県、大阪府、兵庫県、京都府、滋賀県、そして岐阜県と近畿地方を中心に、仏様である観音菩薩をおまつりした霊場を順に巡っていくことを言うのだよ。その一番最初の霊場、これを「一番札所」というのだけれど、これが那智山青岸渡寺というお寺で、熊野三山の一つ、熊野那智大社の敷地内にあるんですよ。

A Y A 神社とお寺がいつしよにあるのですか？

伊藤先生 そう。これこそが熊野三山をはじめ、紀伊山地の霊場の特色なのだね。最初に神社やお寺、修験者の修行場などが紀伊山地にたくさんあると言いましたが、これらは信仰の対象が神様や仏様の違いを越えて、一体としてまつられ、崇拜されています。これを「神仏習合」と呼びます。異なる信仰が対立せず、お互い

を受け入れていくことが日本の宗教の特色といえますね。紀伊山地は、まさに神様と仏様が混在する聖地、霊場とされていたのですね。

A Y A それで西国三十三所巡礼の旅に出る人は、まず熊野を目指すのですね。札所を順番に巡るといえば、四国の八十八ヶ所のお遍路へんろっていうのも聞いたことがあります。

伊藤先生 四国八十八ヶ所のお遍路は、平安時代の有名な僧侶、空海くわい（弘法大師こうぼうだいし）のゆかりのある四国の寺院八十八ヶ所を巡るのですが、西国三十三所巡礼の場合、観音菩薩の霊場を巡るものだと思いますね。観音菩薩は、今、生きている人の願いを聞き入れ、苦しみから救ってくれる仏様として人々の信仰を集めたことから、霊場三十三ヶ所全部巡ると、願い事がかなうと信じられています。

A Y A 私も願い事が何でもかなうなら、今からでも巡礼に出か

きたいです。

伊藤先生 西国三十三所巡礼は、青岸渡寺から始まり、三十三番目の札所の岐阜県揖斐川町の華嚴寺というお寺まで、千キロメートルほどの旅が必要だったのですよ。お伊勢参りに向かい、そして熊野へ、さらにそこから千キロに及ぶ旅をするわけですから、歩くことそのものが苦しい修行といえます。とくに伊勢から熊野へ向かう熊野参詣道伊勢路は、峠道が多く、行き倒れてしまう人も少なくなかったようです。苦勞なくして願い事はかなわないということですね。

A Y A とても長い道のりを歩かなければならなかったのですね。ところで先生、なぜ西国三十三所巡礼の一番が熊野那智大社で、最後の三十三番が岐阜県の華嚴寺なのですか？

伊藤先生 そうですね。観音霊場の巡礼は、平安時代には行われていたとも言われています。ただ、江戸時代のように、庶民が巡

礼していたわけではありません。修行僧などの宗教者らに限られていましたが、都の貴族なども観音霊場への信仰が厚かったようです。ただ、古くは一番札所だったのは、奈良県桜井市の長谷寺という寺院で、三十三番札所は京都府宇治市の三室戸寺という寺院でした。江戸時代とは順番が異なりますね。長谷寺は都の貴族にとつて、大変重視された観音霊場でしたので、一番の札所としていたのですね。そして三十三番目の札所を都近くにすること、都から出発して都へ帰る、つまり都中心の巡礼だったようですね。

A Y A それがいつ頃から、変わっていったのですか？

伊藤先生 一番札所が熊野那智大社の青岸渡寺となつていったのは、平安時代の終わり頃の、皇族、貴族による熊野詣が熱心に行われていたのが理由だったと考えられています。とくに当時の鳥羽上皇や後白河法皇は、生涯に何度も熊野詣に出かけています。このように、皇族や貴族が熊野詣を重視したため、長谷寺から青

岸渡寺へ一番札所の座を移したのでしよう。しかし、この時も十三番札所は、三室戸寺のままでした。

A Y A ということは、最後の三十三番札所が都から離れた岐阜の華嚴寺になったということは…。

伊藤先生　そうです。江戸時代頃になると、巡礼者の中心は、京都の皇族・貴族たちでなく、江戸などの関東方面、東日本の人々が多くなり、伊勢参りの後に西国巡礼に向かい、東国へ帰るのに都合がいい順番になったことを示しているのですね。



西国三十三所巡礼札所（黒丸）

熊野参詣道伊勢路について





熊野参詣道伊勢路の峠道

A Y A 先生、峠道の傾斜がきつくなってきましたね。大丈夫ですか？ところで先生、この熊野参詣道伊勢路ですけど、伊勢から熊野まで、どういうふうに造られた道なのですか？

伊藤先生 いやもう、さっきから息が上がってきて、ここら辺で少し休憩しましょう。あそこに腰掛けるのにちょうど良い石があります。そこで伊勢路の全体像についてお話しますね。

A Y A 私はまだ大丈夫ですけど、先生がかわいそうなので休憩しますね。よっこいしょっと。こうしてみると、峠道って石畳が敷かれてきれいですよね。伊勢路の峠道はすべて石畳が敷かれた道なのですか？

伊藤先生 …。すべてというわけではありませんが、石畳が敷かれた峠道が多いのは事実です。それ以外にも、伊勢路はいろいろと特色ある道です。伊勢神宮からは、川の渡し船に乗ったりしますが、途中まではそれほど山道はなく、平坦な道が続きます。

田丸城下町を過ぎてしばらく行くと、多気町という所にある女鬼めき峠とうげ、またしばらく平坦な道を歩いて、大紀町という所にある三瀬みせ坂峠ざかとうげという峠道を越えるぐらいなのですが、その先の紀北町につながる峠道からは、大変起伏の激しい峠道をいくつも越えなくてはなりません。とくに「八鬼山やきやま越え」と呼ばれる峠道は大変でした。

A Y A 「八鬼山」って名前だけでも恐ろしい感じがしますね。

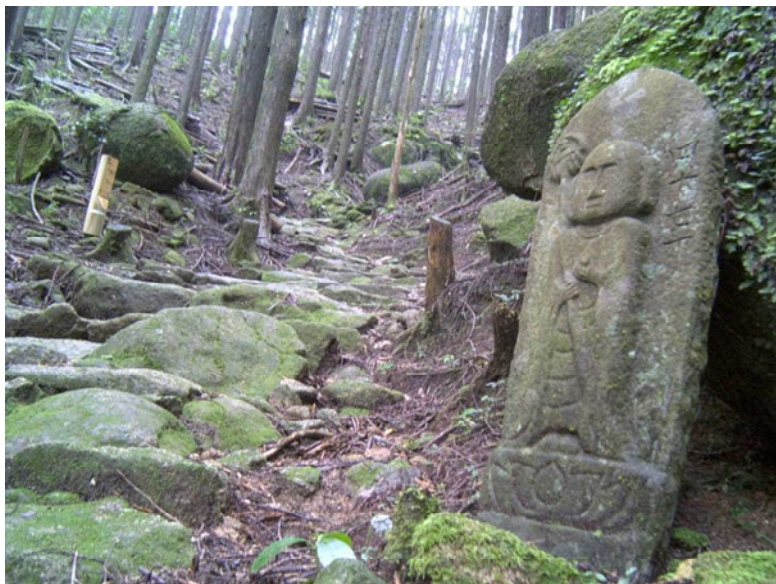
伊藤先生 石畳のきれいな道でもあるのですが、山道が峠を越えてふもとに下りるまで、坂道が六キロメートル以上続く険しい道で、行き倒れの人もでるなど、江戸時代の旅人も散々に苦労したようです。そのためか、「八鬼山越え」は、熊野へ向かう際に、ふもとから峠までの間に、「町石」と書いて「ちようせき」と呼ぶ、昔の単位で一町、つまり一〇九メートルごとに石のお地蔵さんを目印に置きました。峠まで五〇町あるので、お地蔵さんに一町ご

との数字を刻みました。これによつて、苦しい峠道のどの辺りを歩いていくかわかるようになっていました。

A Y A 現代の道標でも、「峠まであと何キロ」とあるのと同じですね。それがお地藏さまというのがいいですね。峠道を歩く旅人を少しでも励ます工夫だったのですね。

伊藤先生 残念ながら、今では町石すべてが残っているわけではなく、しかも一町ごとの順番どおりに置かれていませんが、峠道のあちらこちらで見つけることができますよ。こうした町石は、今から四〇〇年以上前、ちょうど織田信長が天下統一を目指していた頃に、伊勢神宮の御師たちが寄進したこともお地藏さんに刻まれていますよ。その頃には、たくさんの旅人が伊勢路を歩いていたのでしょね。

A Y A 昔は五〇町目にあたるお地藏さんを見つけた時、本当に仏様に救われたような気になったでしょね。



↑ 八鬼山越えの道
 ← 町石 （向かって
 右に「四十一町いせ
 山田大路」と彫って
 あります。）

伊藤先生　その後も峠道は続きます。そうして熊野市の松本峠という峠道を越えると、きれいな七里御浜しちりみはまという海岸に出ます。そこから、この海岸沿いに、熊野速玉大社を目指すか、「本宮道」と呼ばれる、熊野本宮大社へ向かう内陸の街道を通るか、伊勢路は二通りに分かれたのですが、江戸時代の西国三十三所巡礼の旅人は、最初の目的地の熊野那智大社の青岸渡寺を目指しますので、通常、海岸沿いの街道を行くようです。

A Y A　じゃあ、その七里御浜ってとこまで来たら、あとは平坦な道をまっすぐ熊野速玉大社や熊野那智大社まで目指せたのですね。

伊藤先生　七里御浜は「日本の渚百選」などにも選ばれた、太平洋を望むきれいな浜で、昔の絵図にも浜を歩く旅人の姿が描かれたりしています。もちろん、天候が悪かったり、海が荒れたりすることもありますから、浜を歩いていて大波にさらわれる遭難

事故もしばしばあったようです。

A Y A 歩いて旅をするのは、昔はいつも危険と背中合わせだったということですね。ところで先生、昔の街道といえば「東海道」というのが有名だと思うのですが、それと熊野参詣道はどう違うのですか？

伊藤先生 「東海道」というのは、江戸時代には当時の日本の中心、江戸と京都、大坂を結ぶ、最も重要な街道ですね。鉄道にたとえると、東海道新幹線の路線ですね。江戸から京都の間にある五十三ヶ所の宿場は、「東海道五十三次」と呼ばれていますね。街道に宿や食事のできる所がたくさんありました。また、東海道は、江戸幕府によって街道の幅が昔の単位で五間けんつまり九メートルほどを基準にした広い道で、大名の参勤交代やさまざまな物資の輸送のために利用されました。もちろん、多くのお伊勢参りの旅人もこの街道を通りましたが、街道そのものは、参詣のための道と

いうだけではありませんね。

A Y A 熊野参詣道は、東海道と比べて随分と不便だったのですか？峠道が連続しますし、食事や宿の心配はなかったのですか？

伊藤先生 実はその点は旅をするうえで重要ですよ。東海道は、お金さえあれば、食事にも泊まる所にも不自由することはありませんでした。伊勢路の場合でも、基本的には、村には宿がありませんでしたが、それ以外に「善根宿^{ぜんこんやど}」といって、巡礼者なら無料で泊めてくれる家もありました。巡礼者を家に泊めると、泊めた家の者も、巡礼をしたのと同じ功德^{くどく}、つまりご利益^{りやく}があると信じられていたからです。

A Y A じゃあ、まったく山中で野宿しなければならぬ、というわけではないのですね。

伊藤先生 そうですね、紀伊山地には当時、狼もいましたから、山の中での野宿は大変危険ですね。ただ、伊勢路の場合、お昼時

に、山の中を歩いていることも少なくなかったと思います。峠などには茶屋もあり、食べるものもありましたが、それでもお昼ご飯は持っていないと不便です。そこで、「飯行李^{めしごうり}」というお弁当箱が売られていて、それに宿泊した宿でお昼のお弁当を詰めてもらうのです。当時の旅日記からすると、宿代にはお弁当代も含まれていたようです。

A Y A お弁当があれば安心ですね。お弁当がなければ、先生だったら即、行き倒れですよ。

伊藤先生 …。A Y Aさんはさつきから、さらりとヒドイことを言っていないませんか？

A Y A ええっと、先生そろそろ出発しましょうか。あんまりゆつくりしていると日が暮れますよ。ところで先生、熊野参詣道伊勢路って、昔からそう呼ばれていたのですか？

伊藤先生 そうですね、「熊野参詣道」というのは、文化財として

そう呼ばれているだけで、昔は、「くまのみち」とか「さいこくみち」とか呼ばれていたことが、街道の分岐点に立てられた当時の古い道標^{どうひょう}などからわかります。今、私たちが「熊野参詣道」と呼ぶにはもちろん、意味があります。本来、道はいろいろな目的をもった人が利用するものですね。どこかへ旅をするため、商売で売り物を運ぶため、あるいは近くに住む村人が普段の生活する上で何気なく通ることもありますね。

AYA 仕事や学校に行ったり、友だちに会いにいたりする場合も含まれますよね。

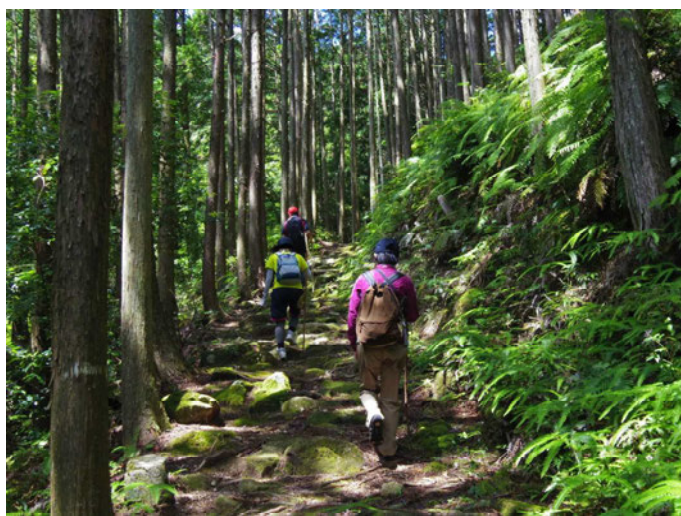
伊藤先生 世界遺産として「熊野参詣道」という場合、大切なのは熊野三山へお参りに行くための道だ、それが文化財として重要なのだ、ということですね。道中の景色が良いとか、石畳の道が美しい、あるいは石敷きの技術が素晴らしいというだけではありません。



← 道標（「右よしの（吉野）かうや（高野）みち」「左さいこく（西国）みち」と彫っています。）



↑ 飯行李（めしごうり）
三重県立熊野古道センター蔵



熊野参詣道伊勢路の様子

A Y A そんな参詣道を、当時だれが管理していたのですか？

伊藤先生 江戸時代は、伊勢路の大部分は紀州藩、つまり和歌山藩の領地だったのです。紀州藩は、徳川御三家と呼ばれる、将軍家の一門のなかでも特に重要な藩で、有名な八代将軍の徳川吉宗は紀州藩出身ですね。この紀州藩が、藩内の交通網を整える目的で管理していました。さらに紀州藩により、新たな道が開かれたり、一里塚を設置したりもしました。一里塚の設置は、旅人に便宜を図るものですから、熊野への参詣、西国巡礼を藩としても意識して整備をしたのかもしれないね。

A Y A 伊勢路以外の熊野参詣道もいくつかあるのですか？

伊藤先生 伊勢路以外の熊野参詣道としては、大坂回りの紀伊路についてお話をしましたが、紀伊田辺から熊野本宮大社へ向かう中辺路、熊野本宮大社には向かわずそのまま紀伊半島沿岸を回り熊野那智大社に向かう「おおへち（大辺路）」、そして世界遺産の

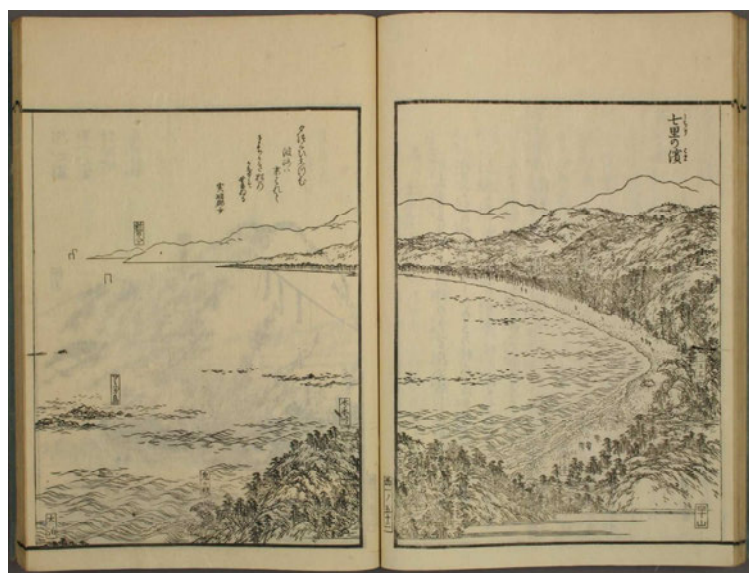
霊場の一つである高野山と熊野本宮大社とを結ぶ「こへち（小辺路）」がありますね。あと、吉野と熊野本宮大社を結ぶ、主に修行者の道として大峯奥おおみねおくがけみち駈道というものもありました。

A Y A 各霊場を結ぶいろいろなルートがあつたということですか？

伊藤先生 それだけではなく、それぞれの参詣道は、利用目的や時代による性格の違いもあります。中辺路は平安時代の皇族や貴族が都から熊野三山へ参詣するのに利用したことは、前に言いましたが、大辺路は、主に江戸時代になって紀州藩の交通網整備に伴い、整えられたといい、むしろ西国巡礼者らを含めて、那智大社や青岸渡寺の参詣ののち、景色のよい海岸沿いの道として観光がてらに利用したともいわれています。あと、小辺路ですが、これは高野山と本宮大社を最短距離で結ぶ急峻な道ですが、江戸時代には参詣道として使われていたという記録がありますし、山伏

などの修験者も利用していたとされています。

A Y A 昔の人はガイドブックも見ずに旅をしていたのですか？
伊藤先生 そうですね。見ず知らずの場所へ何の知識もなしに出かけるのは大変不安ですよ。実は江戸時代でも後半になると、有名な旅の目的地について名所図会めいしよずえと呼ばれる、ガイドブックが刊行されるようになりました。例えば京都から伊勢神宮へ向かうガイドブックとして『伊勢参宮名所図会』というのもありましたし、西国三十三所巡礼についても、『西国三十三所名所図会』というものが、嘉永六年かえい、一八五三年に刊行されました。これら名所図会は、行く先々の地理や伝承が挿絵入りで事細かく記述されていて、そのおかげで随分と旅がしやすくなったと思います。ただし、『西国三十三所名所図会』は、あまりにも詳細で時間をかけ過ぎたのか、途中の第八番札所の長谷寺までの紹介で終わってしまい、続きが作られませんでした。



西国三十三所名所図会「七里御浜」



西国三十三所名所図会「花の窟」

早稲田大学図書館蔵

A Y A そのガイドブックには、土地の名物の食べ物やお土産なんかも載せられているのですか？

伊藤先生 もちろん、そういう情報もありますよ。熊野の場合、昔から海の幸に恵まれているわけですから、例えば紀北町の紀伊長島の港あたりでは、カツオが水揚げされるので、かつおぶし鰹節が作られている様子が描かれていますし、熊野市の木本きのもとという港町では、マグロの切り身を扱っている絵もありますね。食べ物以外でも、七里御浜で採れる「那智黒石」と呼ばれる石を用いた石細工などが紹介されていますよ。とにかく、新鮮な海産物が食べられるのが、伊勢路の旅の楽しみだったのでしょうね。

A Y A 食べ物の話題になると、先生も元気になりますね。

伊藤先生 旅の楽しみの一つだからね。でも、熊野参詣や西国巡礼をする人の中には、肉や魚を食べず、心身ともに清らかに保ちながら旅を続けることもあったそうだよ。

A Y A　それで毎日何キロも歩いたら、すごいダイエットになりそうですね。そういう先生も、熊野参詣道伊勢路を伊勢神宮から熊野三山まで歩いたことがあるって言うていましたよね。信じられないけど。

伊藤先生　∴。「信じられない」は余計ですが、歩きましたよ。今では伊勢路の場合、峠道がとぎれとぎれにあるので、車やバスで登り口まで来て、石畳のきれいな峠道だけを歩いて帰る人も多いのですけど、本当はそれではもったいないですね。伊勢路は峠道でなくても、いろいろな情景を感じることが出来ます。そもそも参詣道は、霊場を目指して歩くわけですから、峠道の一部だけ歩いていても、それが霊場に到る道であることを理解することは難しいですね。可能ならば、伊勢路を通して歩く、たとえば何回かに分けて続きを歩くのでもいいから、「私は伊勢から熊野まで歩いた！」となれば、当時の人の思いや苦労も伝わるのではないでし

ようか。

A Y A 確かに、峠道を一つ歩いただけでは、ハイキング気分には浸れても、世界遺産の価値を感じるには足りない気がします。救いを求めて目的地に向かって旅をする当時の人々の思いと苦勞が参詣道には染みついているはずですよ。

伊藤先生 良いこと言いますね。そのとおりです。それこそが熊野参詣道が世界遺産に含まれることとなった理由といってもいいでしょう。私も、歩いて熊野三山にたどり着いた時は、言葉で言い表せないような感動に包まれました。無事にここまで来ることができたことに、大自然にも、沿道で出会った人々に対しても感謝の気持ち湧き上がってきました。これこそが歩き旅の素晴らしさですね。

A Y A 私もいつか、伊勢神宮から熊野三山まで歩いてみたいですね。でもなぜ、熊野参詣道伊勢路の伊勢から熊野までのすべて

が世界遺産となっていないのですか？

伊藤先生 世界遺産になっているのは峠道が中心ですね。民家沿いの里道や町中を通る道は、熊野参詣道として利用されていた所でも世界遺産に含まれていません。それは道路が舗装されていたり、拡幅されていたりして、道そのものが参詣道として利用されていた頃の姿を留めておらず、復元することも難しいため、文化財という扱いができないからです。しかし、そのような道沿いにも、古い建物や江戸時代に立てられた道標、石仏などが残されていますし、そこを通らなければ、熊野三山へたどり着くことができない連続した道の一部には違いありませんから、世界遺産となっている峠道と同様に、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を理解する上では、等しく価値がある道なのだと私は思いますね。

AYA そうですよー。それでも三重県の世界遺産が峠道の一部だけだというのは少し寂しい気がします。

伊藤先生　ところがそうではないのです。三重県内にあるのは、峠道の一部だけでなく、さきほど言いました七里御浜や、和歌山県との県境になっている熊野川も含まれているのですよ。

A Y A　海岸や川も、ですか？まさか、景色がきれいだから？

伊藤先生　いやいや、七里御浜も熊野川も参詣道として評価され登録されていますよ。どちらも道として目に見えるものではありませんが、七里御浜は、先ほどの絵図でみてもわかるように、街道ではなく浜そのものを歩いていますし、熊野川は、本宮大社から速玉大社へ向かう川船の航路となっていたからです。この二つの「見えない道」を参詣道と捉え、世界遺産の一部にしたことが、「紀伊山地の霊場と参詣道」の特色でもあります。

A Y A　世界遺産に登録できなかった道、登録されたけど、目に見えない浜や川の道を含めて、参詣道として魅力があるというわけですね。



七里御浜



獅子巖（ししいわ）

紀伊山地の霊場



A Y A 随分と上の方まで登ってきましたね。林の中の木漏れ日がとてもきれいです。なんだか霊場へ向かって歩いている、と思うとさらに心が洗われる気がします。ところで先生、その「霊場」なんですけど、「紀伊山地の霊場と参詣道」の場合、大きくは三つの霊場に分かれるのですよね。

伊藤先生 そうです。「熊野三山」、「高野山」、それと「吉野・大峯」ですね。

A Y A そのうち、「熊野三山」なのですが、速玉大社、本宮大社、那智大社の三つからなるのですよね？それって、伊勢神宮の外宮と内宮のようなものですか？

伊藤先生 神社にはそれぞれ、中心にまつる神様がいますね。これを主祭神と呼んだりしますが、熊野三山のそれぞれの神社の主祭神は異なります。本宮大社は、家都御子神で、速玉大社は、熊野速玉大神、那智大社は、熊野夫須美大神といっています。これらの

神様には別の呼び方がありまして、家都御子神はスサノヲノミコト、熊野速玉大神はイザナギノミコト、そして熊野夫須美大神はイザナミノミコトとなっています。こちらの名前なら、AYAさんも聞いたことがあるのでは？

AYA あ、知っています！三柱とも神話によく出てくる有名な神様ですよ。

伊藤先生 そうです。熊野では、これら三柱の神様を合わせて、熊野三所権現くまのさんしょごんげんといいます。それぞれの神社は、主祭神を分けてはいますが、お互いに三柱それぞれの社殿を造営してまつっています。

AYA では、熊野三山は、三つの神社で主祭神は違うけど、お互いにまつり合いつこしているのですね。

伊藤先生 まあ、言ってしまうばそうですね。では、伊勢神宮の場合はどうでしょう。伊勢神宮には内宮と外宮がありますが、そ

れは正宮しょうぐうと呼ばれ、これ以外に、正宮に次ぐ扱いの別宮、さらに摂社せつしゃ、末社、所管社というランクがあつて、それら一二五社を合わせて、広い意味で伊勢神宮なのです。そしてその頂点にある祭神が、内宮にまつられているアマテラスオオミカミです。この神様は古代から天皇家の祖先の神様として別格な扱いを受けてきました。外宮にまつられている豊受大神は、農業や商業の神様として、農民や商人の信仰を集めたと言いましたが、元はアマテラスオオミカミに食事を調達するために呼び寄せられてまつられたとも言われています。

A Y A アマテラスオオミカミを加えると、まさに日本神話の原点が伊勢と熊野にあった感じですね。では、熊野三山以外の霊場ってどうなんですか？

伊藤先生 その一つ、「高野山」と呼ばれるのは、平安時代に空海が開いたとされる、金剛峯寺こんぼうぶじというお寺を中心に、仏教の聖地と

される所ですね。空海は中国の唐で修行し、密教の真言宗という宗派を日本にもたらしました。もう一つ、「吉野・大峯」と呼ばれる所ですが、これは金峯山寺きんぶせんじという寺を中心に、日本に古くからあった山岳信仰、豊かな実りや水をもたらしってくれる聖なる山に対する自然崇拜に基づいて生まれた、修験道しゅげんどうの修行場です。修験道は、山奥を歩きまわり、荒行をして自らを鍛え修行を重ねることで、神仏の領域に少しでも近づこうとするものです。紀伊山地は、元々は異なる宗教の霊場が近接し、互いに交流し、干渉し合った結果、それぞれ争うことなく、次第に結びつきを強め、独特の宗教文化が生まれたのですね。

AYA　それで、異なる宗教の霊場を参詣道で結んで行き来ができるのですね。世界的にみてもめずらしいですよ。でも先生、三重県内には世界遺産に評価されるような霊場はなかったのですか？

伊藤先生　そうですね。霊場として世界遺産登録されている場所はありません。熊野参詣道伊勢路の出発点にもなっていますが、伊勢神宮は歴史的にも地理的にも紀伊山地の霊場として同一の扱いができるものではありません。ただ、伊勢路の途中にも、小さな霊場というか、祈りのスポットのような場所がいくつかありますよ。

A Y A　え！例えばどういう所ですか？

伊藤先生　その代表的なものが、熊野市にある「花の窟^{はな いわや}」ですね。「日本書紀」っていう、奈良時代に作られた日本の古い歴史書を知っていますか？この書のなかに、夫のイザナギノミコトとともに日本列島を創生した神とされるイザナミコトの墓の場所について書かれており、これが「花の窟」を指すのではないかということで、古くから信仰の対象となっていたようです。「花の窟」は、高さ四十五メートルもある絶壁となった大岩で、岩のくぼみ

にお経を納めたりされていたらしく、ここは速玉大社へ向かう浜沿いの道と、本宮大社へ向かう道との分岐点でもあったので、江戸時代には熊野へ参詣する前に必ず立ち寄るような場所だったようです。

A Y A さっきの『西国三十三所名所図会』にも挿絵がありましたね。岩から綱のようなものが伸びていますが、これは何ですか？

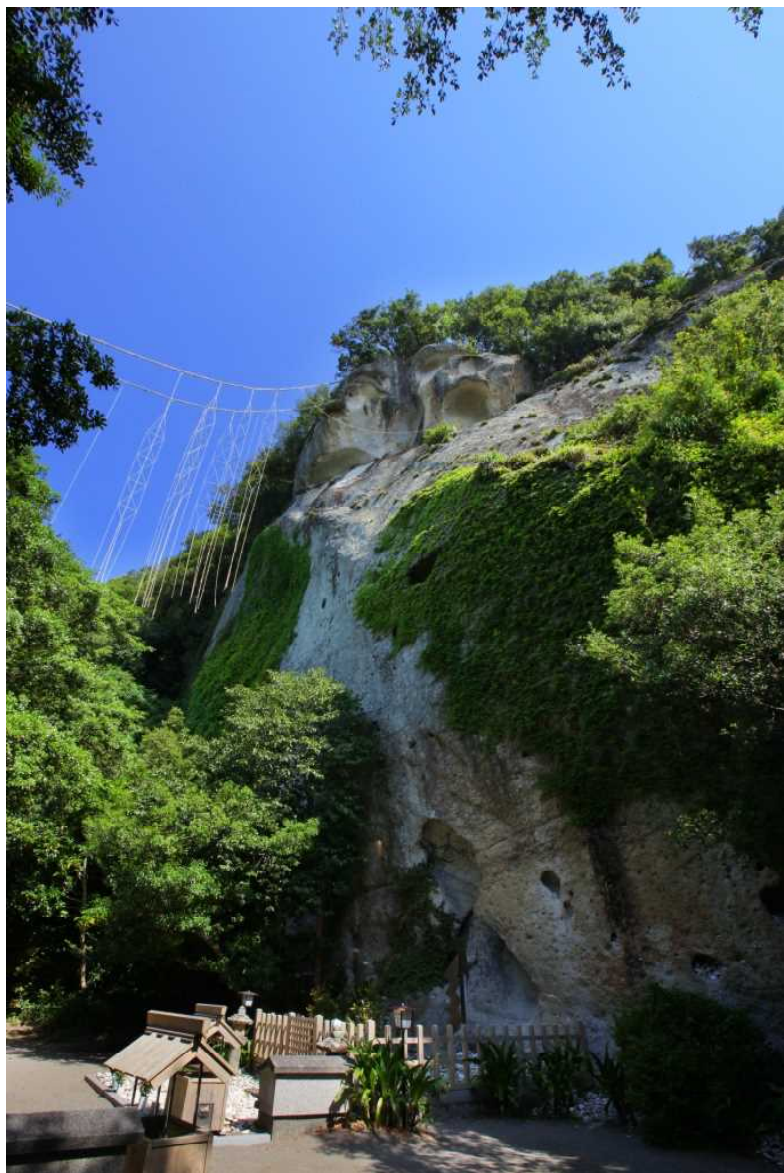
伊藤先生 これが「花の窟」と呼ばれる理由なのですが、岩の上から綱をかけ、花を括り付けています。今でも年二回、二月と一〇月の二日に綱つなを付け替えます。「お綱かけ神事」と呼ばれる行事ですね。

A Y A 挿絵にあるわけですから、江戸時代には行われていたことになりましたね。

伊藤先生 そうですね。あと、伊勢路沿いには、馬越峠道近くの「岩屋堂」と呼ばれる、多くの石仏を安置した祈りの場は、元は

峠にあったものです。同じようなものは八鬼山越えにもあります。





花の窟

歩いて楽しむ世界遺産



A Y A 先生、もう少しで峠のようです。あとひとがんばりですね。大分息が上がっていますが大丈夫ですか？

伊藤先生 ハアハア。ずうつとしゃべりながら歩いているので、気が紛れていたのですが、さすがに疲れました。でもあと少しです。がんばりましょう。

A Y A 峠についたら、また休憩しましょうね。それまでの我慢ですよ。苦勞して歩くのが世界遺産のありがたみでしたよね？でも、先生、今、世界遺産って世界中にたくさんあるじゃないですか。このように、霊場や聖地と呼ばれるような所へ向かう道が世界遺産になっているのは他にもあるのですか？

伊藤先生 世界遺産は、二〇一四年に登録数一〇〇〇件を越えました。しかし、参詣道のようなものが世界遺産となっている例は少なく、最初に登録されたものが、キリスト教の聖地への巡礼路である、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡

礼路」で、八〇〇キロを越える道が、一九九三年に登録されました。その次が「紀伊山地の霊場と参詣道」で、二〇〇四年登録です。そして二〇一二年にはやはりキリスト教の聖地のパレスチナの「イエスの生誕地…ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路」です。

A Y A その三つだけなのですか？

伊藤先生 あと、「道」という名称は付いていませんが、二〇一三年に登録された、日本の「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」のなかに、「登拝とはい」といって、富士山を遠くから眺めて礼拝するのでなく、実際に富士山に登って礼拝する場合の、その登山道は、参詣道のように信仰の道という考えができますね。

A Y A すると日本では二つも信仰のための道が世界遺産になっているのですね。

伊藤先生 そうなりますね。「道」という意味では、メキシコの銀の道と呼ばれる銀を運んだ道、同じように日本の島根県の石見いわみ銀ぎん

山街道^{さんかいどう}、そして二〇一四年について一部が登録となった、有名なシルクロードなどが世界遺産ですが、これらはすべて、信仰の道ではなく、いわば物流などのための道として評価されたものです。
AYA 一〇〇〇件以上ある世界遺産の中で、それだけしか登録されていないのですから、道が世界遺産になるというのは、大変なことなのですね。

伊藤先生 そうだね。でも物資はもちろん、文化や信仰に関わる「道」の世界遺産は、今後が増えるでしょうね。ところでAYAさん。実は私は、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」も歩いたことがあるのですよ。

AYA えーっ！先生、すごいじゃないですか！

伊藤先生 そもそも「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」というのは、スペインでも西の方にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂という所を目指す道です。熊野参詣道同

様、千年以上の古い歴史があり、本来はヨーロッパの各地から大聖堂へ目指す巡礼のための道なのですが、その中でもフランスの道と呼ばれる、フランスからスペインの北部をほぼ直線的に結んでいく道が世界遺産として有名です。私は、その巡礼路の最後の部分、大聖堂まであと百十キロの地点から歩きました。

A Y A 百十キロも歩いたのですか！今日、これくらい歩いただけでへばる先生からは想像もできませんけどね。

伊藤先生 また、そういうことを言う！まあ、実を言うと、大聖堂へ巡礼したということを確認してもらうには、巡礼証明書というものを発行してもらうのだけれど、その条件の一つは、徒歩で百キロ以上歩くことなので、頑張ったんですよ。

A Y A 条件の一つというと、他にも何かあるのですか？

伊藤先生 他に、クレデンシャルという、巡礼手帳をもらい、旅先の教会などにあるスタンプを一日二ヶ所以上で押してもらう必

要があります。

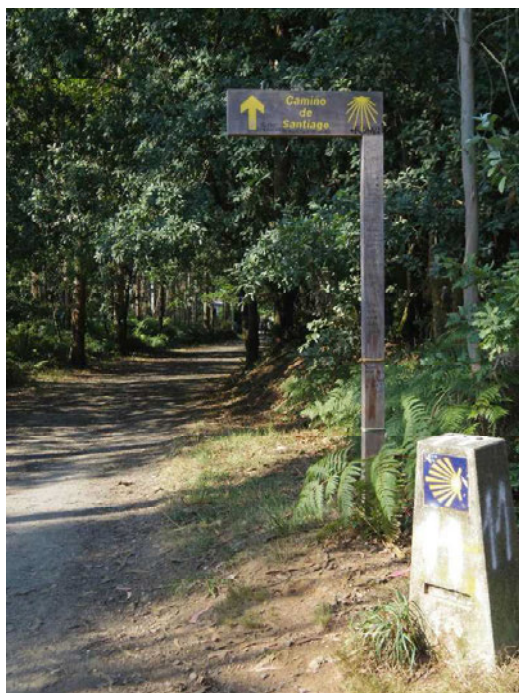
A Y A 日本で言う、お寺や神社での朱印しゅいん集めみたいなものですか？

伊藤先生 似てはいますが、日本の場合、参詣先の寺社で記入、押印する朱印と呼ばれるものは、「お札ふだ」のような扱いですが、スペインの場合、教会のほか、宿泊場所や町や村にある、さまざまな施設にスタンプがあり、巡礼の証明のためとはいえ、まるで記念スタンプのようなイメージですね。

A Y A スペインの巡礼路には、どれくらいの人々が歩いているのですか？

伊藤先生 驚いたことに、本当に多くの人が荷物を背負い、歩いていましたよ。スペイン以外に、ヨーロッパの各国はもちろん、南米やアジアの人もしました。年間で十五万人以上の人が歩いているそうです。

→ サンティア
ゴ・デ・コン
ポステーラへ
の巡礼路



サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂

A Y A そんなに多くの人が歩いていとなると、宿泊施設や食堂などは道沿いにたくさん必要ですね。

伊藤先生　そうです。歩いて旅をするには、それらの施設は充実していないと大変ですね。スペインの場合、巡礼者が泊まるための宿も、食事ができるカフェも、だいたい四キロごとにありました。一番驚いたのは道標でした。分かれ道には、きちんと設置してありましたし、場合によっては、地元の人が自分の家の壁などにもペンキで矢印を書いて、方向がわかるようになっていました。ですから、地図やガイドブックはなくても、目的地に向かって歩いて旅ができます。

A Y A それでも、土地も言葉もわからない場所を、一人で歩くのは心細くないのですか？

伊藤先生　私は、百十キロを四日間で歩きましたが、正直言うとな辛いこともありましたよ。毎日二〇キロ以上歩かなければならな

いし、一人旅だったので、すごく心細かったです。ただ、自分以外にもたくさん巡礼を目的に歩いている人がいますし、沿道に住む人たちも、「良い巡礼を！」という意味の、「ブエン・カミーノ！」という言葉をかけてくれます。そういう人々に支えられ、なんとか目的地にたどり着いた時は、言葉にならない強烈な感動がありました。そして思いました、これがはるばると遠くから巡礼することの素晴らしさなのだと。

A Y A いいですねー。先生、私もいつかスペインと日本の世界遺産の道の歩き比べをしたいです。そして伊勢路も大勢の外国の旅人に歩いてもらえるよう、将来、伊勢路の魅力を世界に伝える旅のリポーターを目指します。

伊藤先生 スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」と違って、熊野参詣道の場合、巡礼を目的として歩き旅をする人は、今ではほとんどいないかもしれません。しかし、熊

野参詣道が信仰の道として世界遺産に登録された理由は、古い道として残されていたという、目に見える価値だけでなく、心の中に生まれてくる価値があることが、実際に歩いてみて体験できるからです。目的地の熊野三山まで歩ければ、感動はひとしおかもしれませんが、一つの峠道を歩く場合でも、これが熊野への参詣道であることを意識することが大切なのだと思いますよ。

A Y A そうですね。あ！先生、峠に着きました。やりましたね。ここにはお茶屋の跡があるそうです。向こうにふもとの町も見えますよ。お腹が空きましたね、先生。町に下りたら何か食べましょう。お魚がおいしいですよ。ちよつと景色を見てきます。

伊藤先生 やれやれ、A Y Aさんはすっかりはしゃいで行っちゃいました。峠の向こうには、ふもとまで下りの道があるというのに。まあ、ここでゆつくり休憩させてもらいましょう。この本を読んでいただいたみなさんも、ぜひ、熊野参詣道伊勢路の歩き

旅を。楽しく歩くことが大切ですよ。

(おしまい)



右上 巡礼証明書・左上 帆立貝（巡礼のシンボル）・下 クレデンシャル（巡礼手帳）



あとがき

本書は、世界遺産登録一〇周年を記念して実施しました、第一回にほんばし世界遺産ゼミナール「歩いて旅する！世界遺産となった道―熊野参詣道伊勢路」の内容をもとにしたものです。

中高生のみなさんに、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」のうち、とくに三重県に関わることにについて、少しでもわかりやすいものをお願い、お話風にアレンジしてみました。熊野参詣道や世界遺産について、もっと知りたい、行ってみたいという気持ちや芽生えれば、大変うれしく思います。読者のみなさんも一緒に、三重県の大切な文化財を将来に守り伝えることができることを願っています。

三重県教育委員会 社会教育・文化財保護課
平成二十七年一月三〇日 発行